

樹

言葉を忘れた苦しさに
ふと黄色の樹に顔を付ける
いつの頃からか、それは知らない

溪流が削り取る感情を
取り戻そうと葉擦れに耳をふさぐ
もどかしげに、首を振って

はかない希望が薄れゆき
霧はゆっくりと滑りゆく
何かの到来にも思われて

おそろしいほどの無力さに
おおいかぶさってくる美の気配
何故に嬉しいか、それは知らない

記憶を呼び戻すことを思うたび
不安をふるわせて通り過ぎる風の指先
慰めに連れ去られるようにも思われて

逃げ出したいほどにおののいて
ふと黄色の樹に顔を付ける
いつまでここに居るのか、それは知らない

(1984.11.18)